

『三言』の「怪異」について —— その特色・研究史・研究方法を中心に ——

陳 洲

要 旨

「怪異」は『三言』にとって欠かせない題材の一つであるにもかかわらず、従来の『三言』研究において、『今古奇観』に高く評価された「人情世態」や「悲歎離合」が広範な題材にわたって論じられているのに対して、『三言』の怪異に注目した論文は極めて少数に留まっている。『三言』の「怪異」に適切な評価を与え、その『三言』中における位置付けをきちんと確認しておくことは、『三言』という作品をより網羅的に理解する上で欠かすことができないことである。その一つ前の段階として、本稿では『三言』の「怪異」ならではの特色、(日中学会における)従来の研究歴史・傾向、及び今後の研究方法への提案を示し、『三言』の「怪異」についての研究の必要性を明らかにする。

キーワード：『三言』の怪異、恐怖及び崇高、滑稽及び卑小、『三言』の研究史

はじめに

本稿では、『三言』¹の「怪異」の特色の指摘、それに関する研究史の整理、及び今後の研究方法の提案を試みたい。

『三言』とは、明末の天啓年間(1621～1627)に呉県(今の蘇州)の文人馮夢龍(1574～1645)によって編纂された短編白話小説集の総称である。これは三部作に分かれ、順に『古今小説』(以下、『古今』)、『警世通言』(以下、『警世』)、『醒世恒言』(以下、『醒世』)と名付けられ、各40篇ずつ合計120篇からなる。その筆致は「極めて人情世態の^{えだみち}岐^{うつ}を^{つぶ}慕^{おもむき}し、備さに悲歎離合の致を寫せり」²と『今古奇観』の笑花主人の序に書かれているほどに、人間世界の喜怒哀楽を見事に代表しているとして高く評価されている。しかし、無論『三言』の特徴はそれだけではない。

『三言』を^{ひと}繙くと、「怪異なもの」(以下、怪異)、即ち「異は、常と異なるなり」³や「怪は異なり」⁴とされているように、世の中の正常・正統として見なされない人間や物事、例えば人間(人間以外の存在)が人間以外の存在(人間)に変身すること、人間以外の存在と恋愛・婚姻関係を築くこと(即ち「異類恋愛」や「異類婚姻」)、さらに人間世界以外の異界を訪れることな

ど、様々な内容が描かれている。そういった怪異を総括すると、

怪奇で醜悪なものゆえの恐怖感をもたらすもの（以下、恐怖）

荘厳で冒涇すべからざるものゆえの崇高性（以下、崇高）

という二つの性質から構成されており、変身・異類恋愛・異界にとどまらず、幅広い範疇にわたって描かれているのが『三言』の傾向といえる。

無論、この傾向は『三言』が編纂された明末に始まった訳ではない。白話小説と深く関連している説唱文学を例として挙げれば、宋代の説話人と呼ばれた芸人たちが各自の十八番の題材を持っていることは『夢梁録』などに記載されている⁵。その様々な題材の中に、「霊怪」、「神仙」、「妖術」と呼ばれる題材がある⁶。特に羅燁の『酔翁談録』に収録された「霊怪」と「妖術」の具体的な題目から、幽霊や妖怪が猛威をふるうなどの恐怖の内容や、整然とした地獄構造と深奥な幻術など崇高の内容が当時の瓦舎で盛んに語られた情景が容易に想像される。しかもこの傾向は「霊怪」と「妖術」に終始するだけではない。例えば、『酔翁談録』の「煙粉」に属する「燕子楼」や「公案」に属する「三現身」などの題目は、後の『警世』巻10「銭舎人、燕子楼にて詩を題す」と巻13「三たび身を現して包竜図、冤を断ず」の種本となっているが、いずれも怪異に関する内容が書かれていたと解せられている⁷。

この傾向は『三言』に至っても少しも衰えない。120篇を閲すると、例えば『古今』巻15「史弘肇、龍虎君臣の會」（以下、「史弘肇」）に見える人間が異獣（白虎）に変身する場面や、『警世』巻14「一窟鬼癩道人怪を除く」（以下、「一窟鬼」）に見える人間と幽霊との異類恋愛や、『古今』巻32「鄴都に遊びて胡母迪詩を吟ず」（以下、「胡母迪」）に見える人間が異界を遊歴する記述など、様々な恐怖及び崇高の内容が書かれていることが分かる。

故に、『三言』の特徴といえは、「人情世態」や「悲歡離合」のような人間世界の喜怒哀楽のみならず、怪異も欠かせない題材の一つと数えられよう。しかも、その怪異が以下のように極めて異色を放つものであることも見逃してはならない。

一 『三言』の怪異の特色

怪異は『三言』にとって欠かせない題材の一つであるにもかかわらず、従来の『三言』研究において、「人情世態」や「悲歡離合」が広範な題材にわたって論じられているのに対して⁸、『三言』の怪異に注目した論文は少数に留まっている⁹。しかし、『三言』の怪異に適切な評価を与え、その『三言』中におけるその位置付けをきちんと確認しておくことは、『三言』という作品を理解する上で欠かすことができないと考える。そう考える理由の一つとして、『三言』の怪異が同時期の作品で扱われたそれと比べても異色を放つものであることが挙げられる。

それは怪異場面であるにもかかわらず、恐怖及び崇高が常に

愉快的な会話や諧謔性に富む描写ゆえの滑稽味（以下、滑稽）

猥雑な「肉体面」や「物質面」の描写やブラック・ユーモアゆえの卑小性（以下、卑小）

と^な縋い交ぜにされて語られることである。その異色さは、明代を代表する怪異ものの文言小説である『剪灯』系列の三大柱である『剪灯新話』、『剪灯余話』と『覓灯因話』¹⁰と比べてみれば理解するに難くない。

例えば同じ地獄遊歴譚であり、よく似た構成を持つ「令狐生冥夢録」（『剪灯新話』巻2）と「胡母迪」とを比較してみれば¹¹、確かに基本的な内容は似ているが、全篇にわたって地獄における崇高な官僚制度のヒエラルヒーと読者に恐怖を与える刑罰についての描写に満ちている「令狐生冥夢録」に対して、「胡母迪」には崇高及び恐怖だけでなく、至る所に卑小及び滑稽として考えられる閻魔と主人公との身分不相応な会話や、鬼卒の主人公に対する諷刺に近い態度や、主人公のまるで地獄遊歴をエンジョイするかのような軽快な気持ちが描かれている。

同様に内容が似ている『覓灯因話』巻1「桂遷夢感録」と『警世』巻25「桂員外、途に窮まり懺悔す」（以下、「桂員外」）とを比較してみよう。「桂遷夢感録」には、主人公の桂遷に悪行の道を歩むように唆した彼の一家が桂遷自身も含めて尽く犬に変身させられるという桂遷の夢が描かれているが、その後桂遷一家がどのような結末を迎えるかについての記述は見られない。一方、「桂員外」ではこのままでは勸善懲悪の効果が聊か物足りないと考えたためか、桂遷一家が実際に相次いで死んで犬に変身するという新しい展開になっている。しかし、この展開は必ずしも沈鬱としたムードではない。何故ならば、犬になった桂遷一家は、最終的には桂遷の長年の懺悔と供養によって「罪業から脱離する」というハッピー・エンドに近い結末を迎えるからである。これによって、「桂員外」は変身させられる宿命に伴う恐怖だけでなく、一種の微笑まじさをも感じさせる力を秘めた作品になっている。

また、意図的な書き直しは同じ白話小説同士の間でも見られる。例えば、『警世』巻28「白娘子、永しえに雷峰塔に鎮めらる」（以下、「白娘子」）の種本としては、『清平山堂話本』の「西湖三塔記」が挙げられるが¹²、「西湖三塔記」の妖怪「白衣夫人」が相次いで若い男性を殺し、彼女の心臓を抉って酒のつまみとして食べることから単なる恐怖しか感じられないのに対して、「白娘子」のヒロイン白素貞の性や排泄と関連している露骨な言論・俗世的な行動、そして彼女によって命を奪われる者は誰一人いないことから陽気さも感じられる。

以上のような恐怖及び崇高と、卑小及び滑稽とが縋い交ぜになっている怪異が、『三言』の大きな特徴だといえる。この異色の怪異は、『三言』のほかの篇章にも多々描かれているため、『三言』の怪異における本質の一つと称しても過言ではないが、系統的に論じられたことは未だ嘗てない。無論、注¹³に示されているように、『三言』の怪異に注目した研究は少数ではあるけれど、様々な角度から『三言』の怪異の特色を明らかにしているが、その多くはこの『三言』の怪異における本質についての系統的な論述とは言い難い。では、一体それらの研究は、如何なる怪異の特色を明らかにしているか、次に今日までの代表的な『三言』の怪異についての研究の歴史及び傾向を見てみよう。

二 今日までの『三言』の怪異についての研究の歴史及び傾向

- (1) 内田道夫氏による、地獄や因果応報などの怪異が人生を合理的に説明するための手段という指摘 (1953年)

内田氏は半世紀前にすでに怪異、彼の言葉を借りると、即ち「地獄の布置」と「因果應理的な解釋」について述べている¹³。

「地獄の布置」について、内田氏は主として「胡母迪」と『古今』巻31「陰司を鬧がせ、司馬貌、獄を断ず」（以下、「司馬貌」）を引用して、それぞれの主人公胡母迪と司馬貌が地獄での見聞を通して、因果応報の理に合ったように人生が定まっていることを悟ることを述べている。胡母迪が地獄で見た、歴代の奸臣たちが残酷な刑罰を科せられることも、司馬貌が閻魔の代わりに歴代の冤罪をかけられた歴史人物に公正極まりない転生の判決を下すことも、実は人間世界の様々な不公平に苦しめられた善良な人々のために、小説の作者の「地獄の布置を借りて三世の思想に依って、合理的な解釋」を行おうという意図によるものだと論じられている。

また、「因果應報」について、内田氏は『古今』巻21「臨安里にて錢婆留、発跡す」（以下、「錢婆留」）と『古今』巻32「木綿菴にて鄭虎臣、冤を報ず」（以下、「鄭虎臣」）を引用して、因果応報には「合理化する因果の説明」が存在しないものと、「種瓜得瓜 種豆得豆」式のような因果説明のあるものと、二つの類型があると強調している。錢婆留は別に善行を積んだ訳でもないが、生まれたときから英雄になることが天命によって定められているという「合理化する因果の説明」が存在しないものに対して、「種瓜得瓜 種豆得豆」式の因果では、「鄭虎臣」の主人公賈似道は幽冥たる世界の定めにも多少影響されながらも、悲惨な結末を招いた原因はあくまでも自分自身の悪行にあると論じられている。

つまり、他力本願といおうか、英雄になるかどうかはすでに定められたものなのだから、人事を尽くすよりも天命に従うべしということをおぼせる前者にしる、自業自得といおうか、蒔いた種は刈らねばならないことをおぼせる後者にしる、怪異が当時の人間に人生の生死存亡や栄枯盛衰における合理性を納得させる有効な根拠として、しばしば『三言』の作者・編集者にネタとして採用されているという内田氏の意見が窺われる。

いずれにせよ、内田氏のこの論文は『三言』に描かれた怪異への興味を示した早期の論文といえよう。一つ大きな研究成果として、それまで日本においては殆ど研究テーマとして注目されていなかった怪異は『三言』の作者・編集者が物語の辻褄を合理的に説明するための有効的な手段として積極的に評価されていることが明らかになった。

- (2) 澤田瑞穂氏による、「発跡変泰」物語に見える宿命主義や変身などの怪異が卑賤なエピソードを伴うという指摘 (1958年)

その内田氏の論文の五年後、漸く『三言』の怪異における性質についての検証、第一歩が踏み

出された。それが澤田瑞穂氏による「話本小説の『発跡変泰』について」である¹⁴。澤田氏は「発跡変泰」、即ち『三言』に描かれた武人と文人の出世話を主題として、選ばれし人間が出世していく際に、必ず怪異現象を伴うと述べているのみならず、場合によれば、そういった怪異現象には「尊貴を保証された卑賤」と称されるエピソードを伴うものと鋭く指摘している。

まず、澤田氏は発跡変泰には早期の「武人帝王発跡談」と後期の「士人発跡談」があると述べ、「史弘肇」や「銭婆留」などを「武人帝王発跡談」の例とし、『古今』巻11「趙伯昇、茶肆にて仁宗に遇ふ」（以下、「趙伯昇」）や『警世』巻17「鈍秀才、一朝にして交泰す」（以下、「鈍秀才」）などを「士人発跡談」の例として議論を進める。そして、怪異現象との邂逅は、例えば「史弘肇」と「銭婆留」に見られる二人の主人公が他の生き物に変身する場面や、「趙伯昇」に見られる趙伯昇の成功は仁宗のある不思議な夢によるものだという結末、そして「鈍秀才」に見られる馬任が三才を過ぎてからはじめて栄華を受けるようになるだろうという占い師の予言の的中、これらは主人公の出世過程に欠かせないシナリオだと指摘されている。

しかし、澤田氏の論文で最も注目すべきは、何といても「武人帝王発跡談」に描かれた怪異現象と、いつか必ず出世することになっている主人公の「尊貴を保証された」という大前提で、「卑賤」なエピソード、例えば雪白の異獣に変身し将来の出世が予告された史弘肇がその一方で盗んだ犬を煮込んで売るなどという卑賤な振る舞いを見せることとの落差から生じる面白さに注目したことであろう。澤田氏はこの面白さ、特に「卑賤」なエピソードに見える主人公のパーバリズムが聊か誇張して描かれていることについて、主人公の名誉を傷付けないユーモラスと見なし、通常の短編の豪傑談や長編の「講史」に見られない文学的な技巧と指摘している。

この指摘は先述した『三言』の怪異における本質、即ち「恐怖及び崇高と、卑小及び滑稽とが緋い交ぜになっている」ことに迫る最初の洞察であろう。「尊貴を保証された卑賤」という新鮮な指摘が、馮夢龍が『三言』を編集するにあたって、如何なる意図を以てそれまでなかった要素を加えシナリオを書き直したか、ひいては彼にとって『三言』の本質とは何かなどの問題を窺い知る上での重要な手掛かりといえよう。

また、内田氏の論文に比べて、澤田氏の論文は聊か分類（無論、それは怪異自体の分類ではなく、「発跡変泰」という必ずしも怪異にとらわれない分類<以下、「怪異外部の分類」>、及びその下位分類としての「武人帝王発跡談」と「士人発跡談」から見る怪異とは何か、という方法論を指す）に対する重視が強い感を受ける。仮に内田氏の論文を『三言』（特に『古今小説』）に描かれた怪異の基本的な機能を知る上での巨視的なものとするならば、澤田氏の論文は『三言』に描かれている「怪異外部の分類」における怪異とは如何なるものかを知る上での微視的なものだといえよう。

ただ惜しむらくは、怪異と「卑賤」なエピソードとの関連性は指摘されているが、怪異自体、例えば「史弘肇」に見られる、独特な変身場面や、その電光石火の際に変身者と周辺が見せる反応から見る怪異の性質についての論述がない。それは、怪異研究が主眼に置かれた論文ではないので当然なことだが、怪異の本質を掴もうとするための方法論としては、澤田氏の「怪異外部の

分類」を用いる手法は、やはりやや遠回りな感があるといえよう。しかし、「怪異外部の分類」における怪異とは如何なるものかについて、微に入り細を穿つ分析がその後の研究論文の模範になる点においても、それまで気付かれなかった『三言』の怪異における本質をはじめ突き止めた点においても、澤田氏の論文はやはり画期的な成果といえよう。

(3) 山口健治氏による、「因縁譚」として考えられる怪異が馮夢龍の編纂方針を知る上の指標という指摘 (1975年)

『三言』の怪異における本質についての論考は、澤田氏の論文以降、しばらくは進展しなかった。その一つの原因として、一九五〇年代から一九九〇年代にわたって、日本における『三言』研究の中心が、殆ど『三言』の制作年代についての特定にあったためと考えられる¹⁵。

『三言』の怪異における本質についての論証ではないが、十数年近い空白時間を経て、再び怪異に関する網羅的な考察が公刊された。それが山口健治氏の「『三言』所収短編白話小説の成立要素 因縁譚の付加について」である¹⁶。その二年前に、山口氏はすでに「『戒指児記』と『閑雲菴阮三償冤債』 話本の恋愛物語研究ノート」を発表して¹⁷、『古今』巻4「閑雲菴にて阮三、償冤債を償ふ。(以下、「閑雲菴」)の結末は原作の『戒指児記』にはなかった後人による付加であろうという入矢義高氏の指摘¹⁸を踏まえた上で、「閑雲菴」は種本『清平山堂話本』『戒指児記』に比べて、怪異な場面、即ち陳玉蘭に前世の恨みを晴らさせるために今世の阮三を死なせなければならぬという因縁の執拗性が付加されたと指摘している。

そして、山口氏は「『三言』所収短編白話小説の成立要素 因縁譚の付加について」において「因縁譚」を主題として、複数の篇章に跨って網羅的な考察を行っている。一口に「因縁譚」といっても、虎の報恩や、僧の転生や、若い女性の幽霊との邂逅や、前世の罪に対する罪滅ぼしなどが数えられるが、いずれも「馮夢龍が、『三言』を編集し、旧来の作品を潤色・改作する際の一つの方向」であると山口氏は論じている。

山口氏は「因縁譚」という分類を鍵として論を構成しているという点で、澤田氏の「発跡変泰」という分類を鍵として論じる手法を彷彿させるが、澤田氏の「発跡変泰」が「怪異の外部の分類」であるのに対して、「因縁譚」という「怪異自体の分類」から見る怪異とは何かに注目していること、そしてすでに論じたように怪異を馮夢龍の編纂方針と関連させているのが特徴といえる。

この二つの方法論を比較すれば、怪異の特質を掴むには、発跡変泰のような「怪異外部の分類」を対象とするよりも¹⁹、やはり怪異自体にメスを入れたほうがより単純明快な方法と思われる。現に、山口氏に例として引用された「閑雲菴」のほか、『醒世』巻5「大樹坡にて、義虎、親を送る」も『警世』巻22「宋小官、破氈笠もて団円す」も『警世』巻30「金明池にて吳清、愛愛に逢ふ」も程度こそ違えど、怪異が描かれた作品と考えられる。その点で山口氏の方法論はより効果的だといえよう。

- (4) 荒木猛氏による、「人生観」・「出世物語」の一環として描かれる怪異が初期の話本に多く存在するという指摘 (1977年・1982年)

本論で荒木氏が採用した手法は、澤田氏のそれを継承したものだといえる。荒木猛氏は相次いで「人生観」及び「出世物語」(澤田氏の「発跡変泰」にあたる)を題材として、さらに『三言』に宋・元時代の説話人が創作したとされる作品を「話本の人生観」及び「武人出世の物語」、明代の文人が擬作したとされる作品を「小説の人生観」及び「文人出世の物語」(澤田氏の「武人帝王発跡談」及び「士人発跡談」にあたる)と分けて、それぞれの作品における怪異の比重を検証した²⁰。

「話本の人生観」について、荒木氏は主として『警世』巻20「計押番、金鰻によりて禍を産む」(以下、「計押番」と「史弘肇」)を対象として、それぞれの主人公慶奴と史弘肇の人生が如何に怪異、即ち慶奴に悲惨な人生をもたらした原因とされる金鰻の崇りと、史弘肇が尋常ならぬ人間の象徴とされる白虎への変身などの要素によって左右されるかを論証し、「話本の人生観」の多くは「鬼神妖物」を伴うものだと強調している。

一方、「小説の人生観」については、『醒世』巻9「陳多寿、生死夫妻」(以下、「陳多寿」と『醒世』巻18「施潤沢、灘闕にて友に遇ふ」(以下、「施潤沢」)を対象として、それぞれの主人公陳多寿・朱多福と施潤沢の人生が如何に本人自身の意志、即ち朱多福が親の反対を押し切って癩病に苦しむ陳多寿のもとに嫁がんとする決心と、施潤沢が徹底的に善行を積んで、積極的に自分が善となす道を切り開こうとする態度などによって左右されるかを論証し、「話本の人生観」との決定的な差異として、「小説の人生観」では「鬼神への信仰の希薄化ないし消滅」が怪異場面の減少を導いていると論じている。

また、「武人出世の物語」と「文人出世の物語」についても、荒木氏の論証はやはり澤田氏の方法論同様、それぞれの出世を導く要素に論点が置かれている。しかし、澤田氏との相違点として、澤田氏が「鈍秀才」のような明代話本にもそれなりの怪異についての描写(占い師の予言)があると認め、「神秘的な宿運があってはじめて本人の実力も発揮することができた」と続けて怪異を肯定的に評価するのに対して、荒木氏は「武人出世の物語」が「文人出世の物語」に移るにつれ、「写実的な方向」でない「超自然的な要素」が消えて「話の展開が写実的になったということに他ならない」と強調し、まるで怪異が小説の内容面・方法論の進歩における障害、しがらみであるかのように聊か否定的に論じていることが挙げられる。

荒木氏は二つの論文を通して、話本における怪異描写の隆盛と、そして衰微ないし消滅を根拠として、早期話本と明代話本の異なった本質を見極めようとしている。端的にいえば、出世物語を含めて、明代話本(荒木氏の言い方を借りると、「小説」もしくは「新作」)になればなるほど、鬼神妖物のような怪異が登場しなくなるというのが彼の一貫した見方である。また、この点に関していえば、荒木氏の主張は、山口氏の怪異とは「馮夢龍が『三言』を編集し、旧来の作品を潤色・改作する際の一つの方向」、即ち怪異が馮夢龍によって積極的に利用されているとする意見とは相異なっている。

無論、怪異に取って代わり、「人間の意志」が『三言』の明代話本の中心を牛耳っているという荒木氏の主張については、筆者は同意するが、怪異が明代話本においてついぞ姿を見せなくなったかといえば、^{あなが}強ちそうとも言い切れない。むしろ多くの篇章に共通して、怪異が、澤田氏によって指摘された本質、即ち「尊貴」が「卑賤」と結び付くと、二者の間における落差が滑稽味を生むという、新しい文学的技法によって成り立っていることを見落としてはならない。

(5) 井波律子氏による、「地獄」・「異界」などの怪異とグロテスク・リアリズムとの関連性が密接という指摘 (1999年)

1958年に初めて澤田氏に見出された『三言』の怪異における本質が、40年近くの歳月を経て、ついに新たな視点を投じられて抜本的に論じられる。それが、井波律子氏の『中国のグロテスク・リアリズム』である²¹。

井波氏は、ミハイール・パフチン氏が『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』²²で示している、ラブレーの作品を解釈する上で最も重要な概念である「グロテスク・リアリズム」の特徴、即ち、「高位のものや精神的なものをすべて、物質的・肉体的なものに格下げ・下落させる作用」²³を手掛かりとして、それまで殆ど系統的に論じられなかった『三言』の世界における、恐怖及び崇高が悉く、滑稽及び卑小に貶められるという本質を読者に見せることに成功した。そして、この「グロテスク・リアリズム」に富む『三言』の世界を一言で纏めるとすれば、即ち

「作品としての性格が、作者・編集者の陽気で放縦な創作精神、即ち或いはエロチックな猥褻さ、或いは暴力的な血生臭さ、或いは嘲笑的な悪口、ひいては下品な糞尿趣味に通じる原理などによって貶められた結果、恐怖及び崇高がことごとく滑稽及び卑小に取って代わられて、その時代の形骸化した道徳や硬直化した真理と対立する、俗世的ではあるが真実な民衆の生き方」

が満遍なく描かれているということである。

例えば、井波氏は、「地獄の話」の章において、「司馬貌」と「胡母迪」などの地獄遊歴談を参照して、地獄を、「カーニヴァルの要素」が満ちる場所とし、読者に快感を味わわせるための愉快な存在だと強調している。

或いは「幽霊の話」においては、「一窟鬼」を引用して、登場する幽霊が幽霊騒動を起こしたが、それも決して恐ろしい光景ではなくて、むしろ人間と幽霊とが行う遊戯のように見えて、ブラックユーモアだと述べている。さらに、「妖怪の話」の章においても同様の趣旨が見える。井波氏は「白娘子」を参照して、人間の秩序からすればけしからぬ存在と見なされる白娘子を、恐ろしい妖怪ではなくて「いじらしいひとりの女」とし、白娘子の純粹にして善良な心を洞察することに成功した。

かくして、井波氏は、澤田氏の『三言』に対する「尊貴を保証された卑賤」という解釈をさらに広げ、多面的な内容にわたって、物語の主人公をはじめとして、崇高な性質が悉く卑小化され

て、下落するところまで下落してゆく当時の民衆の生き方を読者に見せようとしている。しかし、「多面的な内容」を網羅した井波氏の「見せ方」は、怪異よりも、むしろ「悪漢の話」や「淪落の女」や「生き別れの話」など、即ち『今古奇観』「笑花主人序」に書かれた「人情世態」・「悲歡離合」を連想させる要素がより中心に置かれている。現に怪異が扱われたものは、「異界への志向」篇に収録された「仙人の話」・「異界の話」・「地獄の話」、そして「排除の構築」篇に収録された「幽霊の話」と「妖怪の話」の合計五篇にとどまり、全書の一八篇からすれば、決して多いとはいえない。

しかも、井波氏はパフチン氏が『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』に描かれている諸々の物質的・肉体的なものへの下落から靈感を得て、『三言』の実例を挙げながら、恰もパフチン氏がラブレーの作品に対して説明するのと同じことをするかのようになり、「いかがわしく迫力あふれる『三言』的グロテスク・リアリズムの威力」が如何に実例から引証されるかについて詳らかに説明している。

例えば「蕩尽の世界」では『醒世』巻39「汪大尹、火もて宝蓮寺を焚く」を参照して、己の性欲を満たすために、女性の信徒を寺の密室に誘い込んで強姦する僧侶としてのあるまじき悪行を述べながら、明代の仏寺に潜むエロチックな猥褻さと合わせて論じている。「淪落の女」では、『警世』巻35「況太守、死せる孩児を断ず」を参照して、邵氏が下男得貴と密通したすえ、産んだ嬰児を溺死させた後、得貴が他人に唆されて自分の貞節を破らせるために誘惑してきたことを知り、怒りのあまり得貴を脳天目がけて切り付けて、自分も縊死するという惨劇を述べながら、暴力的な血生臭さが『三言』世界を支える重要な要素だと強調している。また、「妓女の話」では『警世』巻24「玉堂春、難に落ちて夫に逢ふ」を参照して、妓女玉堂春が群衆の目の前に、やり手婆と太鼓持ちを「底なしの穴のような業つくばり婆」と「底抜けに貪欲な犬畜生」と罵倒したことを、パフチンの「広場の卑語」という原理と関連させて、玉堂春の悪口ぶりがグロテスク・リアリズムの好例という見解を示している。

しかし、それに対して、怪異に関しては（無論「地獄の話」や「幽霊の話」のような主として「カーニヴァルの要素」が描かれた篇章もあるが）、全体的に言えば、如何に「高位のものや精神的なものをすべて、物質的・肉体的なものに格下げ・下落させる」というグロテスク・リアリズムと相通じる手法を用いて読者の笑いを狙っていくかというプロセスについての説明に踏み込まなかったのは惜しまれる。

しかし、井波氏の研究成果はやはり大きい。それを一言で纏めると、『三言』をはじめグロテスク・リアリズムと関連づけ、それに富む文学として論じたことにある。井波氏は、人間世界の形骸化した道德の背後にかくま隠れた生々しい欲望が、元来の人性に適いこそすれ伝統における正当性などのかけらもなく、ひたすらエログロ・ナンセンスとして具現されるものとして『三言』では表現されていることを指摘し、馮夢龍はこれらの夥しい抱腹絶倒の場面を付け加えることで、読者を思わず笑わせようとしていると述べている。これらの視点は、『三言』研究に新しいインスピレーションをもたらした。

その後、台湾学者趙修霽氏もグロテスク・リアリズム、とりわけパフチン氏が主張するカーニバル精神を手掛かりとして、「鬧」（鬧がす）という字に注目して、『古今』巻36「宋四公、大いに禁魂張を鬧がす」や『警世』巻27「仮神仙、大いに華光廟を鬧がす」など「鬧」の字が入った作品における、読者の笑いを招こうとする『三言』の特徴をグロテスク・リアリズムと関連づけて考察し、「鬧」の性質、即ち「神聖さを解消するための鬧」と「新世界を創造するための鬧」とグロテスク・リアリズムにおける類似性を明らかにした²⁴。

(6) その他の学者による、怪異についての指摘 (2004年・2006年)

その後今日に至るまで、井波氏の検証を膨らませて、グロテスク・リアリズムやさらなる斬新な手法や視点を導入して論じた研究はなく、管見の限り、日本における『三言』の怪異についての研究は進んでいない。一方、中国でも『三言』の怪異についての研究は決して活況を呈しているとはいえない。

代表的な例としては以下の緒論が挙げられる。例えば紀徳君氏は「一窟鬼」と「白娘子」などの話本に見られる「女鬼」と人間との交わりに着目し、『三言』における「勸善懲淫」の重要性を唱えている²⁵。また、李麗丹氏は異類婚姻譚をテーマとして、『三言』における怪異とその種本の間に見られる「母題」（類型）問題、即ち種本より『三言』類型の数の増減及び類型同士の吸収と分裂を提示している²⁶。

以上が今日までの『三言』の怪異についての研究の歴史及び傾向である。研究手法は多岐にわたり、各論的には一定の成果を挙げているといえるが、ここで強調しなければならないのは、いずれの研究においても、しばしば、肝心の怪異の本質、即ち「恐怖及び崇高と、卑小及び滑稽とが緋い交ぜになっている」ことを突き止めようとする意図が欠けていたり、また怪異の本質についての分析であっても、方法や視点の限界から、怪異の本質についての論述が聊か不明瞭であるなどの問題を抱えている点である。筆者は前述したように『三言』を理解する上では怪異への注目が不可欠であり、また、『三言』の怪異を理解する上で、まずその本質を明らかにする必要があると考える。

今日までの『三言』の「怪異」についての研究の歴史及び傾向をあらためて整理すると、次のように纏められる。

- (1) 内田道夫氏による、一般的な指摘
- (2) 澤田瑞穂氏による、必ずしも怪異にとらわれない分類、即ち「怪異外部の分類」から見る怪異とは何か・怪異の本質についての指摘
- (3) 山口健治氏による、怪異自体の分類から見る怪異とは何か・怪異と作者の編纂方針との関連性についての指摘
- (4) 荒木猛氏による、「怪異外部の分類」から見る怪異とは何か・怪異と話本の年代との関連性についての指摘
- (5) 井波律子氏による、怪異とグロテスク・リアリズムとの関連性についての指摘

(6) その他の論者による、怪異についての様々な指摘

澤田瑞穂氏の怪異の本質についての提示といい、山口健治氏の怪異自体の分類から怪異を見るという方法論といい、井波律子氏の怪異の本質と相通じる特徴を持つグロテスク・リアリズムの援用といい、それぞれの研究には参照すべき特長があることは言うに及ばない。こういった特長を融合させながら、やや不十分だと思われる点をさらにアレンジして独自の視点を加え、『三言』の怪異における本質についての探求をより深め、最終的に怪異の本質を突き止めることを通して、『三言』についての再評価を図ることは、今後『三言』の怪異を研究する上で見逃してはならない作業だと思う。

三 今後の研究方法

上記(1)~(6)の研究の歴史及び傾向を参照して各特長を融合させた結果、今後の『三言』怪異研究の有効的な方法論の一つとして、筆者は次の四点を提案する。

第一に、論文の主題についていえば、重点を『三言』の「人情世態」と「悲歡離合」にではなく、それに比べてやや注目度が低い「怪異」に置くことである。すでに述べたように、『三言』には多くの怪異場面が描かれているにもかかわらず、今日の研究重点が「人情世態」や「悲歡離合」など人間世界の面にあるという現状によってやや過小評価されている。こういった注目度が比較的低い怪異にフォーカスを置き、「人情世態」や「悲歡離合」と合わせて研究することによって、『三言』の世界をより網羅的な角度で窺い知ることが可能になるからである。

第二に、論文の分類についていえば、山口健治氏の怪異自体の分類から怪異を見るという方法論を援用することである。澤田瑞穂氏や荒木猛氏の『三言』怪異研究に見られる「怪異外部の分類」から怪異を見るという方法は、怪異要素の有無・多寡・同異などを検証するのに有効である。しかし、この分類の中には怪異が含まれない部分もあるということで、専ら怪異を研究するという主旨からすれば、やや軌道から逸れる。怪異における本質を突き止めようとするならば、怪異自体の分類、例えば変身や異類恋愛や異界などの主題にメスを入れる方がより単純明快で適切な方法だと思われる。

第三に、論文の研究対象となる『三言』の怪異における本質についていえば、怪異ではありながら、恐怖及び崇高のみならず卑小及び滑稽も作者・編集者によって意図的に加えられているということで、かつて澤田瑞穂氏が『三言』の「発跡変泰」の核心に迫った「尊貴を保証された卑賤」及び井波律子氏が西洋のグロテスク・リアリズム思想の中心だと指摘した「高位のものや精神的なものをすべて、物質的・肉体的なものに格下げ・下落させる作用」という考察を継承し、「恐怖及び崇高と、卑小及び滑稽とが縋い交ぜになっている」とことと定義することである。敷衍すれば、『三言』の怪異における「恐怖及び崇高と、卑小及び滑稽とが縋い交ぜになっている」ことの一般的なプロセスとしては、「恐怖及び崇高の出現」「滑稽及び卑小の導入」「恐怖及び崇高の弱体化ないし消滅」「滑稽及び卑小の強化」という展開が考えられる。

まず、物語の冒頭ないし前半に恐怖及び崇高が登場するのに対し、滑稽及び卑小は後半ないし末尾に登場する。また、恐怖及び崇高はしばしば一見それこそが主役のように登場するが、滑稽及び卑小の導入によって弱くないし消滅を見せることを考えると、前者は押し並べてあくまでも脇役に過ぎないが、途中から導入され、そして末尾ないし後半において後者は強化されて、物語の全体的な雰囲気や愉快な方向に導くゆえ、滑稽及び卑小こそが主役として機能するのである。例えば「変身」などについても、「変身における恐怖及び崇高の出現」「変身における滑稽及び卑小の導入」「変身における恐怖及び崇高の弱くないし消滅」「変身における滑稽及び卑小の強化」という風に、それぞれの怪異における「恐怖及び崇高と、卑小及び滑稽とが綯い交ぜになっている」プロセスを指摘する。

第四に、『三言』の滑稽及び卑小における形式・意義についていえば、先学たちの先行研究をもとに、『三言』の滑稽及び卑小を怪異の主体として、更なる研究を深めることである。すでに述べたように、いずれの先行研究においても、論証は必ずしも『三言』の怪異における本質に関するものとは限らないし、怪異の本質についての分析であっても方法や視点の限界から、怪異の本質についての論述が聊か不明瞭であるなどの問題を抱えている。従って、今後の研究方法として、従来論じられていない滑稽及び卑小における形式・意義を論じ、具体的には例えば、「変身」においては

- (i) 変身は如何なる形式を以て読者の笑いを博すか
- (ii) 『三言』にとって、変身とは如何なる意義を持つものか

という形で論ずることが挙げられる。仮に上記に示された先学たちの研究傾向に因んでいうならば、筆者が考えている今後の研究傾向としては

「怪異自体の分類から見る恐怖及び崇高と、卑小及び滑稽とが綯い交ぜになっていること・滑稽及び卑小の形式、意義についての論考」

という方向付けが挙げられよう。

おわりに

以上、『三言』の怪異の特色の指摘・研究史の整理・研究方法の提案を試みてきた。『三言』の怪異は実に人間世界に属する「人情世態」や「悲歡離合」に匹敵するほどの重要性があると筆者は考える。その最も明白な根拠として、ここまで論じてきたように、数多くの怪異に関する描写があることと、それぞれの怪異が恐怖及び崇高と、卑小及び滑稽とが綯い交ぜになっているという怪異の本質によって構成され、しかも後者の要素を見せるに先立って、前者を見せることで、最終的に笑いを以てそれまでの物々しくて恐ろしい雰囲気や緊張感を弱体化させるプロセスによって読者の眼前に現れる、という（同時代の他の怪異小説には系統化されていない）特徴を持つことが挙げられる。それぞれの怪異についての具体的な検証は別稿に論じることとする。

注

- 1 テキストは以下のものを使用する。魏同賢主編、『馮夢龍全集』の『古今小説』、『警世通言』、『醒世恒言』、上海古籍出版社、1993年
- 2 笑花主人「序」、抱齋老人輯、『今古奇觀』、上海古籍出版社、1992年
- 3 劉熙、百部叢書集成『釋名』「釋天」、藝文印書館、1967年
- 4 陸徳明『釈文』による、『莊子』「逍遙遊第一」の「齊諧は怪を志す者なり」に対する注釈。郭慶藩撰、『莊子集釋』「逍遙遊」、中華書局、1961年
- 5 吳自牧、『夢梁錄』「小説講經史」、涵芬樓、1920年
- 6 『夢梁錄』「小説講經史」と『都城紀勝』（耐得翁、『都城紀勝』、文海出版社、1981年）「瓦舍衆伎」では共に「靈怪」のみとなっているが、『醉翁談録』（羅燁、『醉翁談録』、古典文學出版社、1957年）「小説開闢」では「靈怪」のほかに、更に「神仙」と「妖術」の項目を設けている。
- 7 譚正璧、『話本与古劇』「宋人小説話本名目内容考」、上海古籍出版社、1985年
- 8 一つの例として、『三言』についての中国語の研究論文の多くは「 形象」、例えば「俠盜形象」（紀徳君、『三言』、『二拍』中的俠盜形象、『貴州文史叢刊』3期、2006年）・「商人形象」（王瑞雪、『三言』商人形象的文化解読、延辺大学碩士論文、2008年）・「僧尼形象」（劉歡萍、『佛性と魔性：『三言』、『二拍』中的僧尼形象探析』、『棗莊学院學報』3期、2008年）・「女性形象」（王若明、『三言』叛逆女性形象的文化解読、延辺大学碩士論文、2008年）「文人形象」（洪娟、『三言』中的商人、文人和妓女形象、中央民族大学碩士論文、2006年）などの題目であったり、あるいは題目は「 形象」でなくても実際は「 形象」についての内容であったりして、主としては「人情世態」や「悲歡離合」についての分析であることが挙げられる。「 形象」と名付けない論文の一つを紹介すると、例えば欧陽健氏は『三言』と『二拍』における「發跡変泰」場面を手掛かりとして、儒教の「貧しきを患えずして安からざるを患う」（『論語』「季氏」16の1）と「富貴天に在り」（『論語』・「顔淵」12の5）などの「土農工商」本位思想が次第に人心を制約できなくなり、その代わりに「貧しきを患える」や「富貴人手に在り」のような正当な手段が大前提とする「重商主義」が凄まじい速度で明代に發達していったことを指摘する。氏はさらに『三言』と『二拍』とのそれぞれの『發跡変泰』作品は複数の異なる作者によって創作されたため、現実を反映する深さや鋭さも一致していなければ、芸術性においての高低の差もある。しかし、これらの作品における共同思想が正に当時の市民階級の普遍的な心理状況を伺う上のマクロな視点と理解すべきである」（欧陽健、『三言』、『二拍』中『發跡変泰』主題新説、『文史哲』5期、1985年、51頁）と述べ、当時の「共同思想」である重商主義によって人間が欲望に牽引されたままで活きている有様を示唆している。これらの研究は、確かに様々な「人情世態」や「悲歡離合」の面における当時の風俗を明らかにする功績は評価できるが、その一方で、研究の視点が若干制限されていることは否めない。
- 9 後程に詳しく論じるが、管見の限り、『三言』の怪異を全部もしくは一部の題材とする代表的な研究論文或いは著作は次の通りである。日本語で書かれたものとしては、内田道夫、『古今小説』の性格について、『文化』第17輯第6巻、1953年、澤田瑞穂、『話本小説の『發跡変泰』について』、『天理大学学報』第27輯第10巻、1958年、山口建治、『戒指児記』と『閑雲菴阮三僧冤債』話本の恋愛物語研究ノート、『集刊東洋學』29号、1973年、山口建治、『三言』所収短編白話小説の成立要素 因縁譚の付加について、『集刊東洋學』33号、1975年、荒木猛、『短編白話小説の展開 『三言』に見られる人生観を中心として』、『集刊東洋學』37号、1977年、荒木猛、『三言』の分析 出世物語に関して、『函館大学論究』15輯、1982年、井波律子、『中国のグロテスク・リアリズム』、中央公論新社、1999年、などが挙げられる。一方、中国語で書かれたものとしては、紀徳君、『漫議『三言』中的談鬼說怪小説』、『古典文学知識』3期、2004年、李麗丹、『三言』異類婚故事研究、『民族研究』4期、2006年、趙修霽、『論馮夢龍『三言』中的『開』』、『臺中教育大學學報人文藝術類』、21期、2007年、などが挙げられるが、「人情世態」や「悲歡離合」に関するものに比べれば、その少なさは一目瞭然である。

- 10 この三大柱以外の『剪灯』系列作品としては趙弼『効顰集』や陶輔『花影集』などがあるが、ここでは贅言しない。『剪灯』系列の伝播と影響については、喬光輝氏の『明代剪灯系列小説研究』（中国社会科学出版社、2006年）が詳しい。
- 11 小川陽一氏は「『剪灯新話』巻二『令狐生冥夢録』は本巻（筆者注・「胡母迪」）と構成が似ている」と述べている（小川陽一、『三言二拍本事論考集成』、新典社、1981年、83頁）
- 12 前掲『三言二拍本事論考集成』、141頁
- 13 内田道夫、「『古今小説』の性格について」、『文化』第17輯第6巻、1953年、41頁
- 14 澤田瑞穂、「話本小説の『発跡変泰』について」、『天理大学学報』第二七輯第一〇巻、1958年
- 15 この時期の『三言』の制作年代を特定する論文としては、太田辰夫氏の「宋代語法試論」（『神戸外大論叢』4巻2・3号、1953年）、稲田尹氏の「宋元話本類型考」と題する一連の論考（「宋元話本類型考1~4」、鹿児島大学『文科報告』第7・8・9・13号、1958年~64年）、藤堂明保氏の「明代言語の一側面 言語からみた小説の成立時代」（『日本中国学会報』第16集、1964年）、香坂順一氏の「三言のことば（一）、（二）」（『人文研究』第19巻10分冊、第20巻10分冊、1968年）などが挙げられる。また、以上の論文の間における継承関係について、勝山稔氏の「中国白話小説研究における一展望（一）三言各篇の制作年代特定の研究を中心として」（『国際文化研究科論集』第6号、1998年）が詳しい。
- 16 山口健治、「『三言』所収短編白話小説の成立要素 因縁譚の付加について」、『集刊東洋學』33号、1975年
- 17 山口建治、「『戒指児記』と『閑雲菴阮三償冤債』 話本の恋愛物語研究ノート」、『集刊東洋學』29号、1973年
- 18 松枝茂夫等訳、中国古典文学大系『宋・元・明通俗小説選』「解説」、平凡社、1970年
- 19 例えば、『警世』巻18「老門生、三世に恩を報いる」のような殆ど怪異が描かれていない文人発跡変泰もある。
- 20 荒木猛、「短編白話小説の展開 『三言』に見られる人生観を中心として」、『集刊東洋學』37号、1977年、「『三言』の分析 出世物語に関して」、『函館大学論究』15輯、1982年
- 21 井波律子、『中国のグロテスク・リアリズム』、中央公論新社、1999年
- 22 ミハイール・パフチーン、川端香男里訳、『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、せりか書房、1980年
- 23 前掲『中国のグロテスク・リアリズム』、14頁
- 24 趙修霏、「論馮夢龍『三言』中の『鬧』」、『臺中教育大學學報人文藝術類』、21期、2007年
- 25 紀徳君、「漫議『三言』中の談鬼説怪小説」、『古典文学知識』3期、2004年
- 26 李麗丹、「『三言』異類婚故事研究」、『民族研究』4期、2006年